

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成23年度から平成25年度の3か年は、「自ら問う力を育む授業の創造」という全体研究主題を基に、「生徒が主体的に学習し、美術の基礎的な力を伸ばす題材の開発～言語活動の充実を通して～」を研究主題として研究・実践を行った。生徒に身に付けさせたい資質や能力と、学習内容のバランスを見極めながら、思考力や判断力、表現力を働かせ、それらの力を培い、これからの生活に生かすことができる美術の学習を身に付けるためにふさわしい題材を考えてきた。その結果、生徒が主体的に考えながら課題に取り組む学習の積み重ねにより、「自ら問う」姿勢を育成できたと考える。

平成26年度からは、『「深く考える授業」の創造』という全体研究主題の基、美術の基礎的な力を伸ばすことを目指し、これまでの取り組みを継続して題材と指導の工夫に取り組んできた。平成26年度は「発想・構想の力を伸ばす」ことを中心に据え、題材開発や授業の展開について取り組んだ。平成27年度は鑑賞の学習を中心に据え、全体研究において深く考えるための手だてとして掲げられた「視点を変える活動」を取り入れ、作品に対する視点を変えることで見方や感じ方が深まると仮定し、授業実践を行った。

(2) 生徒の実態

本校の生徒は、学習活動に対して概して意欲が高く、主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取り組み方がわかると同様に積極的に取り組む。表現の学習では、自ら感じ取ったことや思い描いたことなどを基に描いたりつくったりする。また、見る人や使う人の立場に立ってデザインや工芸などに表現したりする。鑑賞では、自分の意見を発表し、自分の言葉で記述できている。また、日常的に美術に触れる機会があり、山梨県立美術館など美術館を訪れた経験のある生徒も比較的多い。

このような生徒に対して、よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度を育てるとともに、知識や技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等をさらに伸ばしていきたいと考えている。

(3) 全体研究主題から（本校美術科における「深く考える」とは）

美術の学習は、感じ取ったことや考えたこと、心の中に描いたことや見る人及び使う人への思いから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことと、美術作品や自然の造形のよさや美しさなどについて自分なりの価値をつくりだすことである。「この題材で表したいこと」を明確にするために、生徒は課題に正対し、主題を生み出し、手を動かし、話し合い、試行錯誤しながら構想を練る。身に付けた知識や技能を生かし、新しい表現方法を試したり見方を変えたりしながら、表現と鑑賞の学習活動を行っている。

では、美術科における「考える」とは何であろうか。美術科の学習は、感じ取ったことや考えたことから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことであるが、この場合の「考えた」こととは、「内的あるいは外的な要因によって心の中に思い描いたことや願いなど」である。狭い意味で捉えれば「考える」とは、主題を生み出すために「この題材で表したいこと」を明確にすることになる。「深く考える」ことにより、表現したいことについて「もっと伝えたいことはないか」などと自己批判することも期待できる。また、目的や条件、機能などを基に、見る人や使う人の立場に立って感性的な価値や美的感覚と知との調和を考える際には、形や色彩、材料などを、他者に対しても共感が得られるように見方やとらえ方を深めることも「考える」ことになる。

鑑賞の学習は、美術作品などに対して自分の価値意識をもって見つめたり、他者と批評し話し合ったりなどして、そのよさや美しさを感じ取り味わうことである。「深く考える」鑑賞は、様々な視点から作品などをとらえ直したり、これまでに身に付けてきた知識を使ったり、疑問点について自分から調べたりしながら作品などを見る学習活動である。作品などを理解し深く味わいながらも批判的に見ることを通して、鑑賞の能力がいつそう高まるであろう。

「深く考える」授業を通して、美術科で身に付ける資質や能力を高め、さらに、この経験を積み重ねて継続的に思考しながらよりよいものを目指す態度を身に付けさせたい。

(4) 「深く考える」ための手立て

本校では、「深く考える」授業を目指すにあたり、「視点を変える」ことを授業に取り入れ、自分自身の表現や理解の状態を吟味する経験を積ませることとしている。「視点を変える」とは、本校全体研究総論では、自分の見方や考え方などを客観的に捉えることと、他の見方や考え方などと比較してみたり、異なる立場から見たり考えたりして、自分の見方や考え方を深め広げることとしている。

美術科の学習において「視点を変える」とは、「自分が本当に表現したいこと」や「その作品の本当の価値」などについて冷静に見つめ直し、思索し追究することととらえた。

実際の学習の場面では、具体的には次のような活動が「視点を変える」ことになる。

表現の学習においては、主題を生み出す段階で、発想や構想したことを一度言葉に表したり、他者と話し合ったりすることで、表したい内容や伝えたい内容が自分の中でより明確になる。実際に表現する段階では、形や色彩、材料などの特質や効果を理解し、いろいろ試しながら描いたりつくったりすることで、よりよい作品を目指すことができる。また、「この色や形、材料、表し方で、自分が伝えたいことが表せているだろうか」と自己評価し自問する態度も「視点を変える」ことになる。

鑑賞の授業では、新たな視点や価値などに気付き、見方・考え方を広げ深めるために、他者の意見を聞いたり話し合ったり、知識を得たりする学習活動が、「視点を変える」活動である。自分では気付かなかった作品のよさについて、他者の考えに触れ、話し合うことで多様な価値に気付くことができると同時に、自分とは違う他者への理解も期待できる。

これらの学習の手立ては、形、色彩、材料などの効果を理解しながら、全体のイメージをとらえたり自分の表したいことが表現されているか常に振り返ったりする〔共通事項〕の視点にも通じる。

また、本校の校内研究会では、学習の意欲や動機付けについて「課題や問題を目の前にしたとき、生徒の心の中には、『誰かに伝えたい』『それを解決したい』といった気持ちが自然と湧き上がり、それは、学習活動を展開する原動力となるものである。それらを引き出すような課題設定・場面設定、学習過程や学習活動の工夫が重要となる」としている。

美術科においても、学習意欲の喚起や動機付けのためには、生徒がその授業で学ぶ意義を感じ、身に付ける力を生徒と指導者で共有でき、なおかつ生徒自身の心の中から課題に向き合うことができるような題材を設定する必要があると考える。

これらの手立てを取り入れながら、題材や評価規準を設定し、授業づくりを考えていきたい。

(5) 本年度の研究主題

美術の基礎的な力とは、主体的に発想・構想し、創造的な技能を働かせて表現する能力と、造形的な美しさや作者の心情・意図、表現の工夫を味わう鑑賞の能力である。基礎的・基本的な知識・技能と、思考力・判断力・表現力等を含むこれらの美術の基礎的な能力を身に付けさせるために、本校美術科では、これまでの取り組みを継続して題材と指導の工夫をすることとした。

本年度（平成28年度）は美術科で育む力のうち、「深く考える」ことで、より力を高めることができると考えられるA表現（2）「デザインや工芸などに表現する活動」の発想・構想の能力に焦点を当てる。発想や構想は「伝える、使うなどの目的や機能を基に、対象や材料からとらえたイメージ、自己の思いや経験、美的感覚などを関連させながら育成するもの（中学校学習指導要領解説 美術編）」である。造形やその効果に対する客観的な見方やとらえ方の指導をとおして、他者に対して、形や色彩などを用いて自分の表現意図を分かりやすく伝える力を伸ばしたい。

2. 研究の目的

生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「深く考える」ことをとおして、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、他者や社会との関係の中で客観的に見つめる態度を養い、発想・構想の能力など美術の基礎的な能力をいっそう育てる。

3. 研究の内容

- ① 生徒が「思いや意図」をもち主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。
 - ・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発
- ② 身に付けた知識や技能を活用し、美術の基礎的な力を伸ばす表現と鑑賞の「深く考える」授業計画を立てる。
 - ・ねらいや学習内容などが整理できる、言語活動やワークシートの工夫
 - ・P D C Aサイクルの中で、より主体的に学習ができるような授業づくり
- ③ 〔共通事項〕の適切な位置づけによる題材設定や授業の展開を工夫する。

4. 3か年の研究の見通し

1年目である平成26年度は、「発想・構想の能力を伸ばす」ことにポイントを置き、題材開発や授業の展開について取り組んだ。発想を引き出すための手だてや、より「深く考える」ことをとおして試行錯誤できるような題材を用意した。

2年目である昨年度（平成27年度）は、鑑賞の学習にポイントを置き、「批評的思考力」を伸ばしながら、「創造的思考力」を育てることを目指した。

3年目となる本年度（平成28年度）は、意図が伝わるデザインになっているかを他者の視点から意見交換を行うといった「視点を変える活動」をおして、発想・構想の能力をいっそう高めることができるような題材の工夫を行う。

さらに、3か年研究をおして、美術の基礎的な能力を伸ばすための授業づくりの要素をまとめたい。このことについては、全体研究主題である「深く考える」ことや、その手だてとしてあげられた「視点を変える活動」もあわせて記述し、3か年研究のまとめとする。

5. 実践例

(1) 題材名

第1学年「オーレ！ My Class ～学級のシンボルマークをつくろう～」(全7時間)

A表現(2)(3) B鑑賞(1) 〔共通事項〕

(2) 題材について

① 生徒の実態

1学年の生徒は、全体的に明るく活発であり、何事においても真剣に取り組む生徒が多い。美術科の学習でも、課題の内容や方法がわかると、熱心に取り組む姿が見られる。中学校生活にも慣れ、学園祭にも学級や学年で協力しながら積極的に取り組んできた。

表現の学習では、設定されたテーマを理解し、用具を工夫して用いながら取り組むことができる。鑑賞では、自分の言葉で記述したり、友だちの意見に興味を持って聞いたりすることができる。これらの実態をふまえ、試行錯誤を繰り返しながらよりよい表現を追究する態度を身につけさせたいと考えている。

表現については、これまで明朝体やゴシック体などの字体の学習を経て漢字の意味からイメージをふくらませて絵文字をつくる課題に取り組んだ。また、三原色にちなんで赤・青・黄の3色を用いた色づくりに取り組み、様々な色と出会うとともに、混色の楽しさを感じてきた。

② 授業について

この授業は、生徒たちが所属する学級の特徴をとらえ、それを伝えるマークを制作する学習活動である。まず企業や自治体のマークの鑑賞を行い、シンボルマークの役割や機能について確認する。次に学級の特徴について考え、良いところや課題、目指す学級像について発想をふくらませる。ここでとらえた特徴を基に、学級のシンボルマークのデザインを構想し、表現する。

本題材は、マークからわかることを考え、実際にデザインすることでデザインの役割や機能について考えることができるものである。また、所属する学級をテーマにすることで、他者の立場からの意見の共有がしやすいと考える。さらに小グループで意見を交換することにより、一人ひとりの意見を聞く時間を十分に確保することができる。

指導にあたっては、学級の特徴や理想について考えを深められるよう、考える時間を十分に確保する。また、より特徴が伝わるマークを構想することができるように、コンセプトを明確にし、それを基に発想しやすくする。さらに、デザイン案を発想した後にグループ活動を取り入れ、第三者の意見を聞き、より構想を深める機会を設定する。

(3) 全体研究と関わって

①美術科における「深く考える」とは

美術の学習は、感じ取ったことや考えたこと、心の中に描いたことや願いから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことと、美術作品や自然の造形のよさや美しさについて自分なりの価値をつくりだすことである。「この題材で表したいこと」を明確にするために、生徒は課題に正対し、主題を生み出し、手を動かし、話し合い、試行錯誤しながら構想を練る。身に付けた知識や技能を生かし、新しい表現方法を試したり見方を変えたりしながら、表現と鑑賞の学習活動を行っている。

鑑賞の学習活動においては、「もっと深く（作品などを）感じ味わうこと」について継続的に思考しながら、よりよい見方や感じ方を目指す姿そのものが、「深く考える」生徒の姿であると考えられる。

②「視点を変える」

「深く考える」授業をつくるために「視点を変える」活動を取り入れることとした。美術における「視点を変える」活動として、既成の概念を見直す場の設定や他者との交流による自分のデザインの吟味などが考えられる。

(4) 学習指導要領上の位置づけ

A表現

(2) 伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。

ア 目的や条件などを基に、美的感覚を働かせて、構成や装飾を考え、実際の構想を練ること。

イ 他者の立場に立って、伝えたい内容について分かりやすさや美しさなどを考え、表現の構想を練ること。

ウ 用途や機能、使用する者の気持ち、材料などから美しさなどを考え、表現の構想を練ること。

(3) 発想や構想したことなどを基に表現する活動を通して、技能に関する次の事項を指導する。

ア 形や色彩などの表し方を身に付け、意図に応じて材料や用具の生かし方などを考え、創意工夫して表現すること。

イ 材料や用具などの特性などから制作の順序などを考えながら、見通しをもって表現すること。

B鑑賞

(1) 美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。

ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。

イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。

[共通事項]

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること

イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

(5) 題材の目標及び題材の評価規準

①題材の目標

学級の特徴がわかりやすく伝わるようなシンボルマークを発想し、構想を練る。

②題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
既存のマークから主体的に役割や機能について読み取ろうとしたり、自分の所属する学級に関心を持ち、表現に生かそうとしたりしている。	自分の所属する学級の特徴をとらえて発想し、見る人に伝わるように形や色を生かしてマークを構想している。	表したいイメージを持ちながら意図に応じて創意工夫して表現している。	感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、マークに込められた意図と表現の工夫などを感じ取り、見方を広げ、自分の思いをもって味わっている。

(6) 題材の指導計画 (全7時間)

次	時数	学習活動	評価				評価基準	評価方法
			関	発	技	鑑		
第一次	2	・デザインの役割について知る					・それぞれのマークが表現していることやその工夫について考えることができる。	・活動観察 ・発言 ・ワークシート
		・シンボルマークについての鑑賞を通して、シンボルマークの特徴や役割、機能について考える	○			○		
		・学級のシンボルマークをつくることを知る						
第二次	2	・学級の特徴について考える	○	○			・自分の考えや友だちの意見を基に、教科の特徴について考えることができる。 ・他者に伝えたいことを簡潔にまとめることができる。	・活動観察 ・発言 ・ワークシート
		・学級の特徴をふまえてコンセプトを明確にする	○	○				
		・シンボルマークについて構想を練る (本時)	○	○				
第三次	3	・マークの図案を持ち寄り、学級の特徴が伝わるかどうかグループで意見を交換する	○			○	・コンセプトを基に、図や色、配置を工夫しながら構想を練ることができる。 ・コンセプトがわかりやすく伝わるかという観点から考えを発表したり聞いたりすることができる。 ・学級のシンボルマークについて見直し、練り直すことができる。	・活動観察 ・発言 ・ワークシート
		・グループや全体での意見交換をふまえて、マークについて再度構想を練る	○	◎				
		・画用紙に下書き	○		◎			
		・着彩して作品を仕上げる・制作した作品について振り返る				○	・学級の特徴に応じて創意工夫して表現している。	・活動観察 ・作品 ・ワークシート

(7) 本時の授業

①日 時 平成28年10月1日(土) 10:00~10:50

②ねらい

学級の特徴がわかりやすく伝わるような、シンボルマークの構図を構想する。

③本時の展開

時間	○学習活動 ・活動の内容、指導のポイント及び留意点	評価				☆「深く考える」ための手立て
		関	発	創	鑑	
導入5分	○本時の学習内容について知る ・前時に考えた図案で、コンセプトがわかりやすく伝わるか意見を交換すること ・意見交換を基に、シンボルマークを再度練ること ○本時のねらいを知る。 ・コンセプトがわかりやすく伝わる図案を考える	○				

展開 35分	○シンボルマークが、コンセプトをわかりやすく伝えるものになっているか、グループで意見を交換する ○意見交換を基に、シンボルマークを練り直す	○		○	○	・意見交換の視点として「コンセプトがわかりやすく伝わるか」を提起し、より意図が伝わる図案について考えることができるようにする。 ・グループや全体での意見交換を通して、発想や構想を深める。
まとめ 10分	○まとめ ・数人の生徒に感想を聞き、学習を振り返る ・作品、ワークシートの提出	○				・シンボルマークを練り直すときに考えたことや気づいたことなどについて全体で共有できるようにする

④本時で期待する生徒の姿

- ・学級の特徴や図案の工夫について説明したり、友だちの説明を聞き意見を述べたりすることができる
- ・グループや全体での意見を参考により、コンセプトがわかりやすく伝わる図案を構想することができる

⑤本時で期待する生徒の姿を引き出すための手だて

- ・グループでの意見交換における進行やきまりについてわかりやすく示す
- ・友だちの意見やそれを受けて考えたことなどが整理できるよう、ワークシートを工夫する

(8) 育てたい「4つの力」

その授業や学習の場面で、どのような力を発揮したらよいのかを生徒にわかりやすく示す。

観点	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
発揮する力	伝えたい内容についてわかりやすさや美しさなどを考えて表現することに関心をもち、主体的に構想を練ろうとしている。	他者の立場に立って、伝えたい内容について、形や色彩の効果を生かしてわかりやすさや美しさなどを考え、表現の構想を練っている。	発想や構想したことなどを基に、形や色彩などの表し方を考え、創意工夫して表現している。	伝える、使うなどの目的や機能と形や色彩などの美しさの調和、作品全体のイメージ、作品に込められた作者の思いや願いなどを感じ取り、自分の思いや考えをもって味わっている。
フレーズ	コンセプトを考える	シンプルでわかりやすいマーク	意味のある色や形	他者の視点に立つ

(9) まとめ

ここでは、本時の授業において「期待する生徒の姿」がみられたか、また「期待する生徒の姿を引き出すための手だて」が有効であったかについて、生徒の様子や記述を基に検証する。

まず学級の特徴や図案の工夫について説明したり、友だちの説明を聞いて意見を述べたりすることにおいては、グループでの意見交換における進行やきまりについてわかりやすく示すことを手だてとして活用した。具体的には、進行においては司会の生徒を決め、各自がシンボルマークのテーマと工夫について説明することとした。きまりについては、色と形の二つの視点を基に良いところと課題点について付箋にそれぞれ記入することとした。

成果として、司会役を設定したこと、各自が提案する内容を簡潔に伝えたことで、各学級の特徴や図案の工夫について説明できていたことがあげられる。一方で友だちの説明を聞いて意見を述べることについては、ひとつの付箋に良いところと課題点を分けて記入したり、具体的な改善点まで言及できなかったりする姿も見られた。このことから、ある視点に基づいて簡潔にまとめる経験や、具体的な改善点を自分の視点から生み出す経験をくり返すことが必要であると考えられる。

次にグループや全体での意見を参考に、よりコンセプトがわかりやすく伝わる図案を構想することにおいては、友だちの意見やそれを受けて考えたことなどが整理できるようワークシートを工夫することとした。その際に用いたワークシートは次の図1、2である。

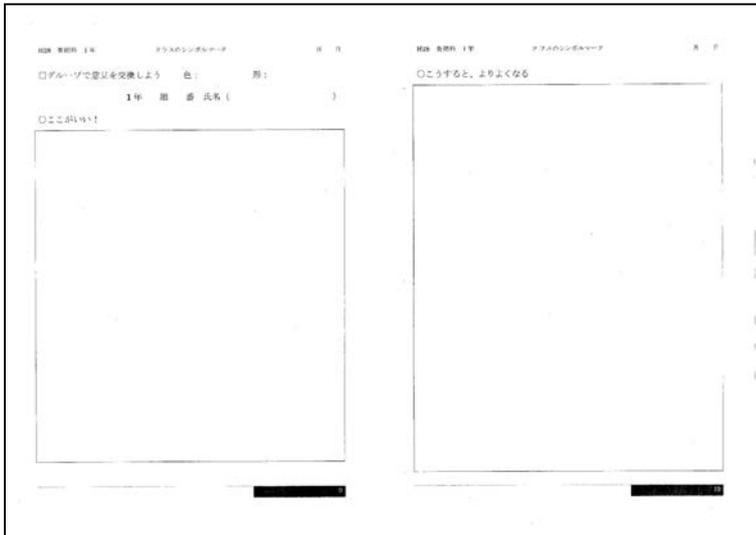


図1 ワークシート①



図2 ワークシート②

成果として、ひとつの付箋にひとつの意見を記述するというきまりを設定したことで、意見が書かれた付箋を良いところと課題点とで貼るスペースを分けたことで、それぞれの意見が整理されたことがあげられる。課題として、改善したデザインを図と記述の両方で記録させるための時間が不十分だったことがあげられる。また、ひとつの付箋に複数の視点からの意見を書くなどの記述の仕方によって、課題点の把握が難しかったことも考えられる。

これらのことから、「学級の特徴がわかりやすく伝わるようなシンボルマークを発想し、構想を練る」という目標を達成するためには、次の三つのことが必要であることが明らかになった。一つ目は、自分の発想したマークについて、目指したいクラス像とそれを表現するための工夫について簡潔に説明できることである。二つ目は、友だちのマークについて、説明を聞き、良いところと課題点を指摘できること、さらに具体的な改善点を提示できることである。三つ目は、友だちから出された意見を受け止め、特に課題点について内容を理解し、自分の中で整理をして改善点を考え、図や文章に表現できることである。

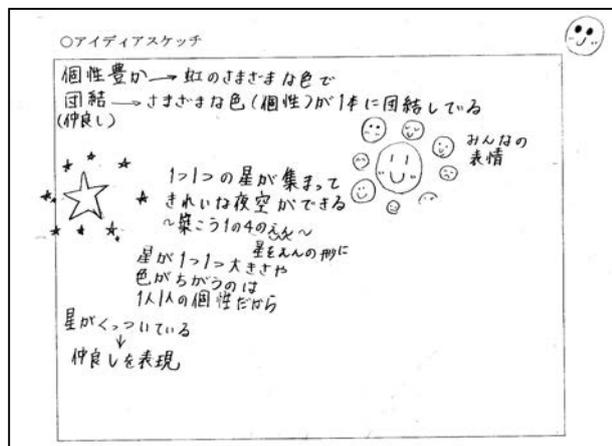


図3 構想 (生徒A)



図4 グループ発表時の作品 (生徒A)

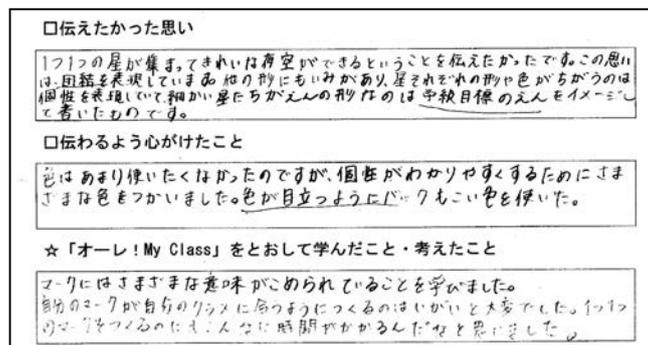


図5 題材終了後の学習感想 (生徒A)

6. 3か年のまとめ

(1) 美術の基礎的な能力を伸ばすための授業づくりの要素

これまでの研究を経て、明らかになった二つの要素について述べる。

一つ目は、身に付けさせたい力を明確にした題材づくりを行うことである。生徒の実態把握を基に目標を設定し、目標が達成できるような題材を検討する。さらに、順序立てて活動を展開することで、思考の流れを予測し、目標の達成を目指す。その過程において、情報の与え方や資料の使い方についても十分考慮する。ここでは、全体研究における「視点を変える活動」により、考えを深めたり、より多面的に課題をとらえたり、よりよいものを求めたりする効果があると考えられる。

二つ目は、生徒自身が、この授業で身に付ける力を理解して授業に臨むことである。これまでの実践において、『育てたい「4つの力」』としてそれぞれの授業や学習の場面でどのような力を発揮したらよいのかを生徒にわかりやすく示してきた。このことにより、授業後に記述した学習感想の中でも、ポイントとなる事柄をふまえて振り返ることができていた。また、題材の導入部分を工夫し、題材全体の見通しがもてるようにすることで、各時間の活動でのめあてを理解し活動しやすくなると考えられる。加えて、見通しやめあてを理解することで、限られた時間の中であっても、試行錯誤する余裕やさらに良いものを目指そうとする姿勢をもちやすくなると考える。

(2) 全体研究との関わりより

ここでは、「視点を変える活動」の有効性と、「深く考える」授業になっていたかについて述べる。

平成27年度は、作品に対する視点を変えること（他者の意見や知識）で見方や感じ方が深まると仮定し授業実践を行った。成果として、他者との交流や知識の活用、他の作品との比較などを行うことで見方が広がり、より深く作品に迫ることができていた。一方で、「視点を変える」ためにグループ活動を行う際に、個人で考える時間と、友だちと話し合う時間の枠組みを明確に分ける必要があることが分かった。また、自分の気持ちについて表現するときには、どんな意見も大切にされるという教室の雰囲気やルールの徹底が大切であることも分かった。

平成28年度は、「深く考える」ことで、より力を高めることができると考えられるA表現(2)「デザインや工芸などに表現する活動」の発想・構想の能力に焦点を当てた。その中で、意図が伝わるデザインになっているかを他者の視点から意見交換を行うといった「視点を変える活動」とおして、発想・構想の能力をいっそう高めることができるような題材の工夫を行った。活動の枠組みやきまりを明確に設定することをふまえてグループ活動を行うことで、多面的に課題に取り組むことができ、またよりよいものを目指して試行錯誤する姿勢を育てることにつながったと考えられる。

これまでの実践から、表現と鑑賞の学習において、友だちとの意見の交流や資料を用いることによる知識との出会いなどで視点を変えることにより、よりよいものを目指して試行錯誤する生徒の姿が見られるようになってきたと考える。本校の生徒は、学習活動に対して概して意欲が高く、主体的に取り組もうとする。関心や意欲の高さを基に、美術の基礎的な力を育てる授業を工夫していきたい。

7. 参考文献

「中学校学習指導要領解説 美術編」(平成20年9月 文部科学省)

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 美術)」

(平成23年11月 国立教育政策研究所 教育課程研究センター)

「平成26年度 研究紀要」(平成27年3月 山梨大学教育人間科学部附属中学校)

「平成27年度 研究紀要」(平成28年3月 山梨大学教育人間科学部附属中学校)

「平成28年度 中等教育研究会要項」(平成28年10月 山梨大学教育学部附属中学校)